河海抄

澪標
蓬生
賢木

七

へ秒2
1272
7

特
1272
7

江海物語卷第七

正六位上物語博士源惟良撰

第十一　澪標

宮城縣図書館

宮城縣図書館

さやうのみくまりの美の拾院の門のこと

清　倫　明　共音　鍵　鍵　琴

いまのさやうにはさうしのみ足行ひ美之古

ものなりの如文明字し者ものを猶し分のみ足行ひ美之古

沈捨遠　アナサヤケトハ行業をといつり河邪作夜劫

相憲帝の事や院の門とある歌沈ある歌上古清江京

位と代遠号不下諸討中古寛仁小一条院ものを漢古よ

たとと太上天皇と号すの清よ師古曰天子之父帰曰皇不嫌

治國不言帝やと帝の門と制せり号ありとと

しまと治そと帝位よりの行ものと門とは中間まま

りや是より帝位に行き給ひて後白河
の宮と申すは朱雀院と云門を冷泉院
と号し奉る所の代狩
神武月より此八月に至る　十月寒風　日記

明石巻十月御八講同所
わかの人とくいをすれまに　稚　幼
世の人さわがしく　きさい宮よりふみ
公卿参り給ひ　春宮御元服の事
たり十月の廿日にいとなむ
くらにいそぎやうしの所こゆるはいの
源氏の大納言内大臣よりはひまをうかがひてくらく

讓國
兼香殿

おるるを見給へくらべ給ひなりの事

内大臣

天智天皇八年十月十五日以内臣大織冠藤原鎌足
為内大臣以阿倍内麻呂為大臣　孝徳天皇元年阿倍内麻呂
を任内大臣以宅仁公為右大臣　外宮
神武天皇の御代に　外宮
左大臣闕なりしかば内大臣より左大臣
まうてと内大臣に令外の官なれば
こう番さきく　繁　摂政職
らく　摂政　行幸　行啓　摂政は天皇に代りて政事
摂政関白朝廷を輔佐し奉る為摂政設置の沿革
関白成立の沿革　摂政関白の職掌
後醍醐天皇奉武帝遺詔摂政の関白の故事

因て且霍光為遺詔を以て弟白を漢宣帝に霍光猶
執政如故霍光還政宣帝猶重き人今間
万機弟白号自ら如故霍光弟仲孺天皇崩後皇后拝
政平と雖も如故然生皇子を以て在襁褓皇后拝
拝政遠除五十六年後同じ帝奉攝拝政を内
履中天皇二年八平群行宿祢為拝政推古天皇朝
皇太子厩戸皇子や帝姓拝政蘇我明日宮皇太子中大兄
皇子又拝政法祀を皇位に即位外曙大政大臣法一位
故東朝臣良房忠仁公奉文徳遺詔を攝政貞観八年
八月十九日始蘇拝政宣旨 去天安二年十二月吉日以内外庶事
皆以人臣為拝政之初也原降位門為執柄氏
弟白湯成天皇元慶元年十一月八日詔右大臣正二位菅原
朝臣基経宣旨始為弟白之拝政 是又弟白之元始也景行
天皇十二年八月武内宿祢為拝梁氏 拝政号

履中天皇二年始置執事官人 執政官
饗田を皇代平群木菟宿祢為執政
人々ふるとき時うけたりしの中まつまつぬたりいかさ山より
おろしたりし人ふるとき人ふるとけちをいてつるあるひ
とりて四とせ以ものとよりうまを
漢高祖欲易太子呂后恐問法良侵之計曰願上不能致
者天下有四人之者年老矣為書使辯士請厚束帛迎
后奉太子書迎四人之高祖置酒太子侍四人從
太子年皆八十有餘鬚皓白衣冠甚偉上怪之問曰
彼何為者四人前對各言名姓曰園公角里先生綺里
季夏黄公上乃驚曰吾招此四人徒翼已成難動 史記
太政大臣よりの拝政のうちもとの六十三ヶ年なり
天智天皇十年正月南代才皇子以大友皇子為太政

大民寛元年改乾元改宝治建仁貞観八年八月十
九日始蒙御改元十三代例
大殿ゝのわらは
為御御乳母為宣旨御稱大殿ゝ今
大殿大民ゝ御乳母号恩栄中納言
寛元ゝ
宰相中将栄中納言ゝ
持統天皇ゝ
散位慶雲二年四月以栗田真人高向朝臣麻呂阿倍宿
禰麻呂為中納言天平八年四月以藤原永手為中
納言従二位数宝長和四年二月始置八人
栄中納言
ゝ
後日記　資　日

二条院内侍ゝ
昔東院七条右兵衛督御乳母
院の神ゝ
やうて
十六日ゝ
贈皇太后宮藤原淑子
明石中宮　光源氏女　母明石入道女
ゝ　伊勢物語
五月六日ゝ　五十日
はゝ
ゝ　汀菊
うゝ
ゝ
ゝ
ゝ

一流あり成の男しなへらる海藻の松のえだやうす物なら
ぬそこふかしれぬ所そなりにいつる是
いとたゞく 巣師 口絵 宮猛武
ひろしれる所なるよりしらべ行と
若有古今可動但し地結中みたりあらしなりと
あらしとなりあるとき津につきしり松風さやかに
うゝるとしらべく舟のと
人然の浦らとしらにいてくれ就とそこに舟をけるる
ゆくゝるめそとたりのきこで浦り行りのと
をあり舟をかりしりのみとじつき月あけあり
らんを津るる
こりなくのりとのわたし弟はけいやなるる浦
り東文いかるすせいらこるれるのを東

執政臣二人例

寛平九年七月三日權大納言兼左近大将藤原時平

權大納言右近大将菅原先帝詔上少主未長間

一日万機之政權大納言藤原朝臣菅原朝臣可奏

下請之事

延喜十八年十二月廿日大納言源昇　藤原道明

已上宣旨可奏弁官文書

たゞしき補佐のよき臣　紀氏には

藤重や　或本にはいにしへよりあり同御すゑの

くはしく侍り　十烈たり

かりそめにつきうちて右近の大将をいかにかく

執政の御禄よ一身にあつまりし人ありしにもくその

君と称し事也左京門権佐りすゝしうたるか

かゝれなくの御例とまねびくわうきいたんと行ひたまふ、

河原左大臣執賜童随身事不久未勤者、

中右記云御堂入道殿令賜童随身九条殿例云

今案沸葉関白長徳三年給童随身六人く

あふえのゆるし

神武十年戊午年春二月皇師遂東舳艫相接方

到難波之碕會有奔潮太急因以名浪速國亦曰浪

花今謂難波訛也

かりにのわたりと御読ありて

堀江には玉しかましを大君の御舟こかむとかねてしりせハ（井手左大臣難波行幸時作）

津の国はなれハゆへは忘るゝそてみてもみまくほしかりけれハ

いましむおかしケふはいすゝと

侘ぬれハ今はたおなし難波なるみをつくしてもあはんとそ思

かとつくし　国史に難波江の堀江澪標たてらるとあり
といふは江にくひをうちたるしるしなり万葉には水脈衛士と
かきて水尾とも書し又ことゝいふ澪標の義なり　かとつくし
といふ江海のみをつくしなり　木にして是を人おとしてといふ
それとして舟とものしるしとなり
なにはのしるしとてたてたる

旅店筆硯　旅宿には硯紙と随分もいひとも旅人
田舎の旅によみてんかならすおほくの
人をたよりて入江のしるしとおもひてゆかりの
すみよしとおもひみちて行とふたりの旅りしらすさわる
露けきの中よりわか旅衣かわくまもなきと
角よりたちの旅とも、またいつくにかやとをもとめん
おもひしるれ　遊女や

おもしろしは
六条のわたりにやと　六条京極は体不定なり
みやこのうち　婿閑磨麗　閑暇 文選 腿膈 疑問
なにはとしるしの中にいふれは是今は文字は塚そなへのこる
むそやりは　潜字也
おしなへてもくりれは
にひ文のうち　花文也　落葉文紙や
文字にてはやさくそひくくるうつはいま文字
国語にては文字くら名に母の文字なり
もとは山にしのこして
世にうまいふて山吉事なりやさしく
此物語相応の門延喜に唯するものは文章語
ほ代の末すれは例なりといつても今古の唯擦る

き事いニ事しなれ之叓ゞ本哥ゞよめるなり

澪標 并一 蓬生

雑事云蓬生ハ詞勢常法定思邨蓬競居而生異
とみてよりうちまとはれしきれ家のかこととよみし蓬
生同事也

蓬生事 杜詩同

一 蓬生非无根漂蕩随高風天寒落万里不復帰本
叢容子念故宅三年門巷空悵詩而詞月和適幸
いそかく君まりし蓬生の人とりよなわか宿まなみち
なけほふれつゝまい路しるとい
わくかなふ人おのいすまれかうにをしかられけはまよみうへら

住とさりける行つかなれにけるをいとと行のことなのなれてとも
かりのまとい読の紫木くかりなの事也
今ま文にまふおいいつゝ行のことこのおまりてまけさせといはさりや
むかしの昔の光とたくいの物はほ行くからく
一 七夕祭とを流れあ、とへく逢とまとそんくかりあひの事
とうけるくの事也と
紫と源氏と大宅よまゝへくそのまりるまかなさけと逢
生君のまとえふかふ事よくへふると 醒水
まへくの世とくおりへそふる 放戯往 又右
やりてへてえふる蘇まこて行のを らくこへくし
いはこさり秋のとゝとゆふりてうち海くけるときさ本こらら
くらへの人ふゑと 白氏文集凶宅詩而也在夕影来
にたりすいかなる 樹神 吹 精休 魚 木魅 山鬼

魅 玉篇曰 木霊 延喜式 物精也 御調度古代又古新
ゆてしともにとこ毎いはあれから
此こそいよのつねのにして
それをいや実祝足下しくこれいふ不叶
弟ろしきしき人の家のくさわといふへし
宗廟と崇不衛 お市 礼記
せしの事
伊勢物語云山しをれ禅師の字おりまうと
きかしといふ夫婦わも
書るをたるの橋姫生よこくしきむしくの僧
於信正のききとしてとある同也
葉えにしもしれとかよびちこあらそたのし字礼と
いき滝く門させりさへの云の北の事

ふすらふあまれのつきくを
總角 卅号毛詩 憶汝派角時 東坡記 総角は童名也と
作つゆいさわ行きなれかまし 牧童のうしすり
徒周云花云冠者或は小童名也と其急
大文といふあかのいに思ひて 不要物也 云云すと
の二や事すり
野等萩
里いまつく人古いし宿たまや庭を離しあきの野すゐ
奥義抄云の野也万葉よい萆の字とのうとあり
広与 かまりん森竹好こゝや力目のしりくやいか
楪奕 娘いつれて古物絵すり
海さくりとのふりしれ 幣
らねしきんやいはへのみちのくにと
紙屋紙 陸奥国紙 檀紙也陸奥紙より檀紙とすへし檀紙は万葉にみちのくにのまゆみとかとあり

紙屋川と小野平野中とを隔てられ、はつせ仁和寺
と号し山おろし多しとすれば
うらいとうさい信もうを祈るして
奏聞おわんぬ　所信仮
ゆすうなれしきやとんにく
うとしき下とをつるとんとうて行きはうんを
祐重の事を
源氏還住大将事不見但児女日ものこと
教示
くやはとうらう
そんうらう　熊
うあいのうしに況や見但や日本記よい指字とう
うとうらう指言の事なし

うあうまよあひはいうじと
宮をはくひのとあるまよあひよろぶ
をはくひのとはくはくと
をはくはくつのあるかるはくと
世中は昔うやはうかうはくはうう
世中はうかはうはうはうはうはう
よのうはあんはんはんはんはんはう
みうのはうあるまやはうはうはう
はんはあるはこはうはうはあるはあ
をまうりまはいはかはうはうはう
とうはの殿はいこ信のはまはうはう
はは月石はまはみるはははよ八幡とこるはうはう事
はいそはは行とはの春源をは神は月はは八幡
はうとは、討入は同じ三年共日は又源氏は大臣は

年二月也世を禅師者の何ものも格大納言殿の
八幡宮いつの年横並に義也や柳は並の次第文流あり
欲空家つ〻ず源光行ず〻は並一蓮生並二関屋や伊行
ずよい開屋と一番にたなりそれ時代お浮世を開や
世〻源氏海京の次年常陸介上洛ありて源氏
石心指りあひ年者者也
いかのにうり五　知ー見ー煩悩ー衆生ー命ー
法花経曰劫濁別所但約濁世悪世煩悩濁指
四銘使為解見濁指五利使為所命濁指主指文濁
所記云唯悪世八百至三百亦未有濁至二百歳為
五濁始〻
かすとわとうあとにうんなうクのうちとたうう
侍郎字元卿舎中行下開三逆文選曰三逆就　洞別明
三逆七門母父ら井一逆くうち則よ行ひ是いう
なう家ありクらすの
うらうをかいうう行いえいうれと　煩費欲
うしう安　明元　日本紀者うまもとあり
わうのクのたうううあうあつてかつよ者海う
う九天よけうりて
きあのうけじりいハ天或九天ハ仏髪しそれなりさよ
しううえきあのううとうすりとせんとほり近代い墨
ずはうあのり
じかりのくのえうう　董元名
親行ハ為家つ〻ず所行ハ源氏物語ハ人ハううとの
井わのハ代為好郎代ハ金不完ハ〻
董安者ハ思方ハ一ありとハ董ハのハ地ハ

御名代の方を以て御校奏

こゝに行きてこゝに

蓬を乳母の事やまゝに乳母の通稱

むつゝゝそもゝ四りの

たゝかつゝと行くに母の年のしさしを玉とらしゝ

髮をとりやを玉ゝうの盛男の綾とをうし

侍撰りみゝゝ

伊勢集のの歌ゝ

ようつゝやはして

たゝじ弟の神をすゝ

の中りようゝすゝ

ちたゝすゝをもゝ

山の

平の神々道祖神の事

羅城の人よりさゝ

物をうゝ山神のゝしきの

見者

黄帝四十年の夫中より家未の人み接行の御ゝ

敢ふ為文中ゝ遠より霧御の名して弥生共河聖四

昔為神行者ゝ

号ゝ夫ゝの神ゝ

餞送の不ゝ祖席ゝ

人ゝ弟の

上婦悅落日行道神 初唐韵云楊音楊漢語抄

云多死人乃姉弟編語曰李氏接於大心接察色

聊ゝ通欲如何

わゝ

俺 漢語抄 櫻妹 同

ゝの中ゝ

ゝ雪の

ゝ行ゝ

雪ゝ

一　ならもちのかましきやらやまのうちに　此はなかりを

うつしのにさかなしいかいとく

ならしてやいはもよう綱にとありしひとよりふるさとして

あれたる家のこころをよめりやうたなりむらさき

なかなかにおもひ夜ふかく月影にかくらもさびしかる

風たち侍りて

人まちに夜もしるまで夜ふかきあはれの音をききつつなれ

なきくれにつつたえ

一　松むしのまちかねやしのびとよふる秋の野にすむらん

もろ松の葉なり　宰帝畫寢　編結

ゆきにたる露としものはかなくはいつ入てまつる

帝王略曰梁孝元皇帝博極群書才弁冠世不

好聲色篤信玄釋多忌諱庭草無芟令鞭之

江陵院隋王僧

隋王僧辯等立第九子是為敬帝太平二年禪

位于陳封江陰王或説云八代記云梁武帝馬鞭

とあらて露を拂ふよしにのうとし一勘

春秋獻馬檛及馬鞭　日本紀第九

一　おもる侍りに　このまて露は毎しゆきりてときこゆ

みさらいはさもや世界のしばしらは露は毎しまたやも

いさらちかなのうちらつくしくもちらつつと

のつらもの志りくし

いふしかくなりけり　西法し

うこのやしいは　納法香幸横し

をれすゆ来よりひやわは　思すれく

速しくはうつくさせ秋やといふすれ山より枝よかうと

一云いかしみさをはなしおまへきさなくし
いさしそれ作りよゆかれたるおひにさら事作りさい
のさいとへしして　とつてしてすり
りれくへしかおと松の木さくなりにかり
り柱とへいしへそ気よされ松の木さくぬよ入る　射桓
りかわりよたよ候へし
すひかやいるの外よなりへくさ
一昔物語よすこうら人を宿さとたりしあそりよ
古人云一日顔叔子事さ己家へ来よい塔こゆうら
とおり或文宴とさらかをあうし奥入云顔叔子引にしふ
人男の化りのりとき生れさひのためと塔なんと
こうらて我とそうらりおりくのうら事やさと
毛詩云昔者顔叔子独処于室隣之釐婦又独処

於室夜風雨至而室壊婦人趨而至顔叔子〻〻
納之而使執燭放乎旦而蒸尽縮屋而継之自以為避
嫌之不審矣若其審者宜如魯人然魯人有男子独処
室者隣之釐婦又独処室夜暴風至而室壊婦
人趨而託之男子閉戸而不納婦人自牖与之言曰子
何為不納我乎男子曰吾聞之也男女不六十不同居今
子幼吾亦幼不可以納子婦人曰子何不如柳下恵然嫗
不逮門之女国人不称其乱男子曰柳下恵固可吾固
不可吾将以吾之不可学柳下恵之可孔子曰欲学柳
下恵者未有似於是也　巷伯篇
此事毛詩史記ニト共ニ為在欲当とこ事なり或ハ当
仏閣人家之通する欲仏閣ハ当人家ハ当也各
別之塔を一同し仏善道の住不也非当儀也　若今

物語雲字玉字と誤べし　白注文中有不見く
未勘
或説ニ云中納言物語ニ云ふ事あり源氏物語ニ
物ゝ性ニ貪欲の女房大輔机下のゝ引きのよ
ゝ書ニ書あり若し狭下こほつと破事也く
まつりこ事いとのつて　賀茂条兼信辨也
いてこうたといはるらしあ　ゝ板下の書ゝ
おのいとさこにてて　おいの物の書ゝ仮りのつし
るしたなあるあるまゝ　よめつ物ゝ仮りのつし
きとしらあり
ゝ物ゝ我ゝ
しりまいてたて　ゝくゝかゝ
せしいのゝうしとゝ
ちゝきゝ
いしとうとかうもせし
是以後物語ゝ家有略ゝ

並二開扉
世みやかに行てかつおさる様をうさとますゝる祠の前也
かのうきくといさゝかさわさり
宮樟の木くのきされたるとしらてとあつまりまゑや
いきさふ行をふりたり　竹宰
行くこと見つきさよすさま行くる木の山と吹ことを風さふ
筑波根のこ○かおつるゝ気のいぬそつれて渡とぬるゝ
奥入之比所の此事携鳥勘ん
京まりすゝ行く人のうるみ林をひらいの行るゝ
此本遊生の泳なりすこれ祠とみさり
いさしゆくもしいてに　石山寺　聖武天皇御願金鐘仙人建立之
舊記ら聖武天皇師僧正朗弁者先生震旦僧行基
為求法向舎衛国旅房流浮海切截数月遅留七皇

者先生流浮舶師之不顧切揺渡海修行僧院年尓
時伴修行僧為酬日板之恩可生将来国王之肉坂
截祈撰以共念力生日本国王也於今生楽書修世一
受者国也朗弁奏之建立大伽藍之為後世之資糧天皇
依教喩建立東大寺奉鋳大仏依之砂金尽之大是
之有叢中有人奏之水鳥邊建立伽藍祈請砂金出来
於者夢驚令求勝地建立観音像不便其月下野
国初置砂金令之石山寺是也
殿はおるゝ山ことはねまて
粟田山こゆまたる橋と山へてもおあふ行はいけるやうわまき
みちも行りあつと
樟ちきのやすつとこくれいたみをさりあつとむそうりまゝ
せきさ山りみるなりゆく

岡山藩の杉村氏のけとあつミいるけそけるきりさ海
車もこれ行つと　けりつと狩
ないりつく　類廣
夏くれあと行きくしきくしきくしつくるそめさ海
色く襖　狩襖し　紀伝　深橋
ろ人の岡しくいあ寄ひとてたりり
若と遠近は寄の岡と浪しと　異朝例し
行てくれせきあくき湖とや海あ信水と人ゞ面体
行くれ来や
岡こてあくりの杉人あとそ信めよんくけとる
右近のせくけく　解すの
わくしりあくちとたのくしとれひのやしはるぬくと
はくい遠近ちくるぬくい　湖海や

岡守人行くやくくうさ海りるくな
常陸お引と多坂寄ちくりくへくいつるの
くしくきつくちくと　仕地絵人中人のちいさやる
るとくれそしくくくくいり見て物くつくて
ミつとてくれいや
はくしとくもくぬる
あ行ん他の中人やくくし就もくぬなれくちする
なくけ行ものと　うくよたくあくりくとつくや
あいなの行きくやくして　進恐　日々記
行くくに必ずねくれくの寄よくわきくくの行
妹人ふりくみくくき花の美とたくくくにおりてきつん